

平成 29 年度 愛媛県議会 地域の声を聴く会

県議会では、議会基本条例の趣旨にのっとり、広報活動の充実を図り、県民に開かれた議会活動を推進するため、平成 27 年度から、「愛媛県議会 地域の声を聴く会」を実施し、県民に議会（委員会）の取り組みを紹介し、議会（委員会）活動に対する県民の理解促進を図るとともに、地域で県民の生の声を聴き、地域の現状と課題等を把握することとしております。

今年度は、下記のとおり実施し、地域代表者の方からは、多くの貴重な意見をいただきました。

総務企画国体委員会

開催日	平成 29 年 12 月 19 日（火）
開催場所	宇和米博物館 12 号室（研修室）
テーマ	西予市における地方創生の取り組みについて
参加者	<p>地域代表者</p> <p>西予市地域おこし協力隊（まちづくり推進課） 加藤 雄也 西予市野村シルク博物館 館長 亀崎 寿治 西予市野村シルク博物館 主任 那須 重昭 四国西予ジオパーク推進協議会 ジオガイド 河野 美紀 一般社団法人 ZENKON-nex 代表理事 齊藤 正</p> <p>総務企画国体委員会委員 文教警察委員会委員（オブザーバーとして参加）</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 27 年 4 月に、地域おこし協力隊として西予市に着任し、ジオパーク事業の支援と、森のようちえん活動を行っている。 <p>地方創生は、人・金・仕事を都市部から地方に引っ張ってくる事業が多いが、それだけでは不十分で、地方でも地道に人・金・仕事を造れる土壌づくりが大切だと考えており、私は、教育を通じてその実現のために努力している。県にも森林環境税を活用し</p>

た「森のようちえん」推進事業があるが、これを広げるような形で進めていければよいと思う。

- ・養蚕業は昭和 50 年をピークに衰退の一途をたどっていたが、近年、愛媛県・西予市とも養蚕業に対する意識が変わってきており、3 年前に底を打って以降、少しずつ上向いてきている。しかし養蚕農家は高齢者が多く、新規養蚕農家の獲得が求められる。関西で生糸を生産しているのは野村だけになっており、その役割は大きいですが、担い手不足に加えて、現施設は老朽化しているうえ、2 トンまでしか対応できないのが課題である。
- ・新規養蚕農家のために、西予市では 3 年前から桑の苗を作って無料配布している。また、県・農協・農家と連携して研修施設も整備した。都会の 30 代・40 代の方に興味を持っている方が多いので、どう呼び込むか検討していきたい。また、新規養蚕農家は女性一人では大変なので、法人化などの手助けも行いたい。
- ・西予市は、市全体がジオパークである。これまでジオガイドの仕事を通じて、保護、教育、ジオツーリズム(地質観光)などに取り組んできた。現在は、ジオミュージックを使って、地質や地形に関心のない方の呼び込みも目指しているが、すぐに効果が表れるものではないので今後も努力していきたい。
- ・宇和米博物館において、インキュベーションを行っていこうということで LOCA プロジェクトを立ち上げた。若い人の起業等の手助けができればと考えている。現在は、カフェのインキュベーションということで活動している。県内のみならず全国に統廃合によって不要になった施設はたくさんあるので、それを利用してカフェを開業したい方は、是非修行に来てもらいたい。いずれにしても「博物館」・「米」・「教育」になぞらえた事業を展開し、運営している。

質疑応答

Q 伊予生糸増産のためには、お金と人と施設を一体として整備する必要があると思うがどう考えるか。

A 繭の生産量について、まずは 2 トン(18%が生糸になる)を目標にしているが、農家の高齢化も進んでおり、難しい状況である。

ただ、日本で生産量が増えているのは愛媛だけなので頑張っていきたい。

A 野村シルク博物館に行ってもお蚕さんは見られない。行政としては、博物館が老朽化しているので、織物館と養蚕が一体となって見られる施設を整備できたらと思う。

Q 需要があるのにできないのは何が原因か。始めるためにはどういったものが必要か。

A 蚕室、蚕具、桑が必要であるが、蚕具は生産中止となっており、最近やめた農家から預かって修理して使用しなければならない。また、桑は、育てるのに3年かかる。

A 養蚕は、昔は変動相場で価格の変動が激しく、収入が安定しなかったため、就農の際に、年配の方の理解が得られにくい。

Q 桑はどこへ植えるのか。植える場所は十分にあるのか。

A 蚕はすごく繊細な生き物であるため、少しの消毒でも全滅してしまう。そのため、桑を植える場所は気を付けなければいけない。田んぼやミカン畑の近くは消毒の影響を受けるのでよくない。また、負担軽減のため、できるだけ集約して植えたいということもある。新規養蚕農家のためには条件に合うところを確保しており、今もさらに造成中である。探せばあると思う。

Q 養蚕農家の収入はどれくらいか。

A 繭1キロ当たり4,050円である。これは日本で一番高い価格である。人件費等々は大日本蚕糸会から補助を受けているので、これがほぼ収入となる。

Q 森のようちえんについては、交流人口拡大のために、西予市の子どもだけでなく松山市などの子どもも集めてはどうか。また、他の市町と同種の事業との交流は行っているのか。

A 他の市町との連携はまだ行っていない。南予地域を中心に活動している。

Q 地域おこし協力隊の任期満了後はどのように引き継ぐのか。

A 森のようちえんについては、任期満了後も西予市に住み、継続していききたいと思っている。

Q 地域おこし協力隊にはそれぞれの想いがあり、行政とぶつかることもあるのではないかと。行政の考えはどうか。

A 行政と民間が一緒になって事業を行うのが望ましいと思う。
行政中心ではなく、民間に委託できるところは委託して、事業を続けていきたい。

総括（中田総務企画国体委員長）

本日は、西予市における地方創生の取り組みについてということで地域を代表する方々にお話をお伺いし、大変参考になった。
これからも地域のため鋭意、日々の活動に取り組んでいただきたい。

総務企画国体委員会の会議の様子





環境保健福祉委員会

開催日	平成 29 年 12 月 18 日 (月)
開催場所	四国中央市 子ども若者発達支援センター 3階 会議室
テーマ	四国中央市における発達支援の取組みについて
参加者	<p>地域代表者</p> <p>ジョブアシストUMA 所長 井原 佳代</p> <p>川之江小学校特別支援学級保護者会「かおり会」 世話人 森川 恵里</p> <p>特定非営利活動法人 今人倶楽部 副代表 高塚 政生</p> <p>不登校を考える親の会「ほっとそっと mama」 奥井 真理子</p> <p>義務教育終了児童保護者 由良 芳雄</p> <p>環境保健福祉委員会委員</p> <p>農林水産委員会委員 (オブザーバーとして参加)</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <p>・発達障がいには、その年代に応じて必要な支援を行う必要があるが、職員の人材不足に苦労している。「福祉は人なり」ということで、職員の資質・専門性を重視し、日々研鑽に努めており、法人のみならず、地域の社会福祉に貢献することにより、社会福祉全体の底上げにつながることから、TEACCHプログラムを活用したセミナーを開催している。セミナーでは携わる者として無知と偽善を思い知らされると同時に正しい知識、具体的ノウハウ、尊敬</p>

やもっと知りたいという欲求を得られる機会となっている。今後は、医療、福祉、教育や労働との連携を進めているところであるが、学齢期にかかわる教師の方への実践セミナーの機会提供などの課題があると考えている。

- 四国中央市から新居浜特別支援学校に80人程度通学しているが、卒業後に地元でどうやって就労していくかが課題である。また、一方で労働者の立場として、障がい者と一緒にどのように働いていくかを認知し、労働者の立場として障がい者の一般就労に理解を深めていくことも重要と考える。
- 特別支援学級においては、特別支援学校の教師と異なり、希望していないのに担当となるケースがあり、特別支援教育の技術や知識に個人差があるため、教師に対して福祉なども含めた幅広い研修を充実させてほしい。また、進学の際に、支援が必要であるにもかかわらず、親の思いだけで普通の学校に進学させてしまうケースもあるので、第三者を含めて進路を考えるようなシステムがあればよいと思う。さらに、学校教育だけでは支援が届かないケースが多いが、教育、福祉、行政の間には大きな壁があるように感じるので、お互いが情報交換し、一緒の方向に向かって支援できる体制を構築することが課題であると考えている。
- 施設利用の上限は39歳までであるが、それよりも年齢が上で前科のある方は発達障がいのために軽犯罪を繰り返すケースが多く、こうした方を支援する仕組みがほしい。
- 新居浜の特別支援学校に通学する子どもが多いことから、市立の支援学校を検討してもよいのではないかと考える。市立学校が拠点となり、生徒の利便性の確保や、同校から教員を派遣することにより地域の教師の育成が可能になると考える。また、その上に専科を設け、職業訓練を行うことにより、卒業生のみならずその上の年代の人も含めた訓練を行うことができるようになってほしい。
- 義務教育期間中は、学校や指導教育があるが、義務教育を終えた後の子どもたちは、家庭以外で自己肯定できる場がないことから、そうした場を設ける必要性を感じる。また、就労や進学などの自立するための道筋を行政にどうつなげていくかが課題であると考えている。

質疑応答

Q 小児慢性疾患の関係者と情報交換することがあるが、保護者の方が疲れている場合がある。保護者の相談窓口として、現在あるもの以外のどのようなものが必要と考えるか。

A 親の意見が第一の選択となる場合があるので、第三者の客観的な意見がもらえるような窓口がほしい。

A 学校に相談員がおらず他校の相談員に相談せざるを得なかったので、各学校に窓口としての相談員を配置してほしい。

Q パレット（子ども若者発達支援センター）ができたことによるメリットと今後の課題はどうか。

A 10年間のノウハウの蓄積があるとともに、市のバックアップがあるというのは信頼性のうえで心強い。課題としては、地域の人材育成、民間と異なる第三者的役割や制度の大きな枠組み作りにおいて力を発揮してほしい。

A 障害者の就労に関して、一般企業への周知や企業とのマッチング機能を発揮してほしい。

A 「困ったときはパレットへ」ということで、障がいのある親子の拠点ができた意味は大きい。しかしながら、教育と福祉の間に壁があるように感じるので、垣根を越えた連携を図ってほしい。

A 就労等にしても中軽度の方が優先され、重度の方が後回しにされる傾向がある。このため、ナイトサービスや土日の余暇支援などの重度の方を視野に入れた日中活動以外の行先を確保してほしい。

A パレットでは、療育の日とは別にフリータイムを設けており、身体症状が出て療育の日にいけない場合も、同じような境遇の方と接することができるフリータイムには行けるなど、柔軟な活用ができるようになった。

Q 前科のある者に対する対応はどのようなものがあるか。

A 具体的な対策は特になく、単純に職を紹介しても、人間関係を構築できず長続きせず、累犯を繰り返してしまう場合が多い。このため、発達障がいを持つ方には、短期間でもよいので職に就き

ながら支援できる体制を地域で構築できればよいのではないか。

Q 行政に対する希望のようなものはあるか。

A 地元の企業とのマッチングや行政的な立場での就労後のフォローをしてもらえる人材がほしい。

A ジョブコーチの制度もあるが、人数が不足している。就職がゴールではなく、就職し続けることが必要であり、障がいのことも理解したうえで、雇用主と雇用者が円満な関係を築けるような、社会とつなげる橋渡し役となる人材が地域に必要ではないか。

総括（徳永環境保健福祉委員長）

本日は、四国中央市における発達支援の取組みについてということで地域を代表する方々に示唆に富んだお話をお伺いし、大変参考になった。

財政状況も厳しい折、優先順位もあるが、夢を実現するためには、関係者の小さい心の積み上げが必要である。

福祉には現場を知る方の後押しと地道で継続的な活動が必要である。四国中央市は県内の発達障がい支援の聖地であることから、けん引役としての役割を期待している。

環境保健福祉委員会の会議の様子





農林水産委員会

開催日	平成 29 年 12 月 18 日 (月)
開催場所	愛媛県立農業大学校 3 階研修室
テーマ	本県農業の次代を担う人材育成について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>愛媛県農業法人協会 会長 牧 秀宣 愛媛県農業指導士会 会長 大程 幸子 J A えひめ中央営農部 経営支援・担い手育成担当部長 杉野 等 愛媛県立農業大学校同窓会 坂本 真子 愛媛県立農業大学校学生 矢野 晃一</p> <p>農林水産委員会委員 環境保健福祉委員会委員 (オブザーバーとして参加)</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 農業法人での活動を通じて感じることは、人間関係が繋がらないと人は育たないということである。農業大学校では、社会人を対象とした研修も実施しているが、社会人と高校を卒業した子どもたちが一緒に学ぶことができれば、子どもたちは、先生から教えられないところも学ぶことができ、更に有意義なものになると思う。また、人を育てるためには、リーダーの養成が不可欠であり、農業大学校には、リーダーを養成するという観点からもお力添えをいただきたい。 ・ 内子町で落葉果樹の栽培を行いながら、農業指導士会で、人材育成や地域農業の活性化に取り組んでいる。人を育てるのは人であり、去年は、新規就農生を 1 年間受け入れたところである。今を生きる私たちが頑張ることが、ゆるぎない愛媛農業を担う第一歩になると考える。 ・ J A えひめ中央では、平成 25 年度から新規就農者に対する研修を行っており、平成 27 年には新規就農研修センターを設置し、これまでに 35 名の研修生を受け入れた。研修内容は、圃場管理

や農作業支援が中心であるが、今後は、大規模経営を目指す農業生産法人を育成し、基盤整備の終わった園地をのれん分けしていく仕組みを整えたい。

- 農業大学校を卒業後、兼業という形で就農した。いろいろな会合に出席すると、新規就農は非常に大変であり、特に収入面が心配であるとの声を多く聞く。農業大学校卒業後、一旦、農業団体等に入って、そこで社会性を身に付けてから就農した方が、すんなり就農できるのではないかと思う。あこがれる農家を増やすことが農業を志す人の増加に繋がると思う。
- 実家は八幡浜市真穴地区で柑橘農家を営んでおり、将来は経営者として頑張りたいと考えている。農業には、いい品質のものを作れば儲かるという楽しさもあり、新品種の生産など複合経営にも挑戦したい。課題は、収穫期の人手不足であり、JAを通じて全国にアルバイトを募集しているが、それでもなお不足している状況である。

質疑応答

- Q 内子町において新規就農者を受入れるメリットは何か。また、受入れにあたり大変だったことは何か。
- A 新規就農者はすばらしい夢を抱いて農業を志すが、現実には厳しく、夢と現実は一緒ではないということを感じていく。地域の者ができるだけ就農者の気持ちに沿うよう努力することも地域の役割であると思う。大変だったことは、夏場の体調管理のサポートなどがあげられる。そういう時は、身内のように接する気持ちが必要だと思う。
- Q 六次産業化の成功例はあるのか。
- A 六次産業化をすると、農家の負担が大きくなる。元々は農商工連携であったが、今は、効率化で地域に農産物を加工する中小企業がなくなり、農商工連携ではなくなっている。地域に加工場を作れば、資源を生かす力はあると思う。
- A 個人で六次産業を行うには、手間や費用などの負担がかかりすぎてメリットも少ない。

Q 真穴地区では、耕作放棄地はたくさん出ているのか。それは、跡取りがないからなのか。

A 高齢農家が増えるとともに、後継者がいないのが現状である。

Q 後継者がいない土地を、隣人や若い人たちが引き受けて農業を継続することはできないのか。

A 温州みかんの場合、個人経営では3ha位が限界なので手が回らない農家が多い。

Q 人が大事であるということについて、どのようなイメージを持っているのか詳しく教えてほしい。

A 昔は、人間としての子弟関係があり、効率よく動くことができた。今、いい意味での百姓バカが育つような環境を作る時期に来ているような気がする。農業大の伝統を伝えていく努力を我々も含めてしていかなければならない。それをすればおのずとリーダーが生まれると思う。

Q 情報を得るコミュニティに入っていない隙間の人はいらぬのか。

A 隙間があるから活性化すると思う。今は、現場に行く人の予算がつかないために情報が集まらない。情報収集をするために自由に活動できる人を作してほしい。

Q J Aえひめ中央の支援対策事業は、他のJ Aにはないものなのか、あるいは、他のJ Aでもできるが、J Aえひめ中央だけで実施しているものなのか。

A J Aえひめ中央は、全国的にも一番営農に経費をかけているJ Aである。運営については農協の経営の中で行っている。体制づくりをしっかり固めて、基盤整備ができたところで長く農業ができる人材を育成していきたい。

総括（石川農林水産委員長）

本日は、本県農業の次代を担う人材育成についてということで地域を代表する各分野の皆様にお話を聞かせていただいた。

皆様の農業に対する熱い思い、人材づくりに対する思いを拝聴し、大変心強く思った。今後の議員活動に活かしていくとともに皆様方にはこれからも地域のため鋭意、日々の活動に取り組んでいただきたい。

農林水産委員会の会議の様子



経済企業委員会

開催日	平成 29 年 12 月 20 日 (水)
開催場所	サンライズ糸山 研修室
テーマ	サイクリングによる観光振興について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>今治市 観光課 サイクルシティ推進室 室長 渡部 誠也 サンライズ糸山 支配人 川原 賢二 NPO法人シクロツーリズムしまなみ 代表理事 山本 優子 ジャイアントストア今治 店長 武田 恭輔</p> <p>経済企業委員会委員 建設委員会委員 (オブザーバーとして参加)</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・瀬戸内しまなみ海道振興協議会が取りまとめたサイクリング客数のH27年度の推計値は 325,853 人で、前回H24年度調査時の174,935 人と比べ 86%増加している。また、愛媛県のレンタサイクル貸出台数は、H22年度以降右肩上がりで見られ、H28年度は愛媛・広島両県を合わせて 14 万台となり、中でも外国人利用者が増加し、これまでのアジア圏の国々に加え、ヨーロッパ圏の国々の伸び率が著しい状況にある。 ・今後は、日本における「サイクルツーリズムのゴールデンルート」形成を目指すとともに、自転車を活用したまちづくりに取り組む自治体と連携し、自転車新文化の啓発や地域活性化を図り、地方創生の先駆的な取り組みをしていきたい。 ・サンライズ糸山のレンタサイクル年間利用者数は年々増加しているが、H28年度は、えひめいやしの南予博 2017 や今治市内のショッピングモールのオープンにより、今治市近郊の利用者が減少し前年度を下回った。H29年度はH27年度並みの水準(約 59,000 人)に回復する見込みである。 <p>サンライズ糸山のレンタサイクル保有台数は 540 台で、近年は電動アシスト付き自転車が増加している。</p>

今治市から指定管理を受けている一般財団法人今治勤労福祉事業団の独自事業として、

- ① 今治～尾道完走認定証発行事業
- ② SHIMANAMI CYCLEAN活動(清掃活動)
- ③ キッズチャレンジサイクリング
- ④ 宿泊客対象“おもひでサイクリング”
- ⑤ 安全走行啓発活動

などを行っている。

- ・ レンタサイクルの貸出台数が激減したH15年度から、島しょ部を活性化させるため、島ごとに自転車のモデルコースづくり事業に取り組んだ。事業を進めていく中で、自転車旅行者をもてなすためには、島を越えた連携が必要であると感じ、しまなみスローサイクル協議会を発足させた。この中でネットワークを形成し、これを母体にシクロツーリズムしまなみを結成した。

結成の一番の目的は、サイクリストを迎える基盤を住民みんなで作っていくということであり、活動内容としては、民家の軒先やガソリンスタンドなどを高速道路のサービスエリアのような休憩ポイントとして提供する「サイクルオアシス」がある。開始当初は県内で20件だったが、現在では300件を超えている。

また、安全分野ではヘルメット着用の取り組みを行い、愛媛県や今治市の自転車に関する規則改正に繋がる取り組みが行えた。

さらに、自転車を持ち込める「サイクルトレインしまなみ号」を運行し、これについては欧米等たくさんのサイクリストを受け入れられるよう、四国一周に広げたいとの思いがある。

今後は企業への働きかけを拡大し、サイクリストを受け入れるための基盤整備をより一層強化していきたい。

- ・ ジャイアントストア今治店は、H24年に今治駅構内にオープンした。ジャイアントストアとしては国内初のレンタサイクルサービスを開始した。また、レンタサイクル利用者向けにシャワールームやロッカールームも完備している。

H26年には尾道店がオープンし、今治～尾道間でレンタサイクルの乗り捨てサービスも行っている。

レンタサイクルの保有台数は約40台でロードバイク、クロスバ

イク、スポーツバイクが中心であり、高価なものでは 40 万円クラスのバイクもラインナップしており、質の高い自転車を提供している。

レンタルのハイシーズンは 3 月から 11 月で年間約 2,300 件の貸し出しを行っている。過去 3 年間の貸出実績は 10% 増の状況が続いている。 繁忙期には予約をお断りすることもあるため、幅広いサービスを行うためにも保有台数を増やすことができると考えている。

以前は、経験者のレンタサイクル利用が多かったが、最近では、しまなみ海道の認知度向上やスポーツバイクの普及などにより、経験者が未経験者の友達を誘い、その友達がレンタサイクルを利用して一緒にしまなみ海道を楽しむケースが増えている。

また、海外からの需要も高まっているため、マニュアルを作成するなど、スタッフの語学力を向上・カバーするための取り組みも行っている。

さらに今後は、インターネットを活用した取り組みにも力を入れていきたいと考えている。

質疑応答

Q お荷物手ぶらサイクリングサービスについて教えてほしい。

A これは佐川急便を利用したもので、当日の朝 9 時半までに荷物を受け付けて、19 時までには目的地のホテルへ届けるサービスである。閑散期にはあまり利用はないが、4 月から 10 月では月平均で約 10 件の利用がある。ただ、基本的にサイクリストは軽装で、殆ど荷物を持ってこないケースが多く、簡単なショルダーバック、身一つだけで来られる方が多いというのが現状である。

Q 高齢者にはヘルメット着用が十分に浸透していないと思うので、提案等があれば県等とも共同して取り組んでほしい。

A 私たち住民の活動は、気づきがたくさんあっても、それをどこに持っていけばよいか分からないので、提案を受けてくれる窓口が明確であればそれを持っていきやすい。例えば、この地域はタンデム自転車が走行できる地域ではなかったが、愛媛県のえひ

め夢提案制度を活用して、民間から規制緩和を働きかけることができた。今治市は他の市町と比べヘルメット着用率が高いが、これはこれまでの地道な啓発活動の賜物であり、その重要性を感じている。

中予や南予の小学生が、学校行事の一環で、自転車に乗りにしまなみ海道へ来てくれているが、そういった教育現場で自転車を楽しみながら安全啓発等ができればよいと思う。

Q 皆さんの自転車による観光振興に係る活動の中での苦労話をお聞かせいただきたい。

A H15,16年当時、島しょ部で活動を始めた時の一番の印象は、しまなみ海道への不満が多かったこと。通行するのに料金が必要であることや、船が無くなったことへの不満が多くあった。そういった中で、住民にしまなみ海道を活用したまちづくりをやっていこうという夢を説明していくことが苦労したことかなと思う。

また、国際サイクリング大会に関して、地元では不満もあり、今もその不満はある。ただ、うれしいこともあって、まちづくりを住民と共に進めていく中で、80歳代の自治会の方から「人がたくさん来だしたよね」と。自分たちがこのブームを作り出したという自負心のようなものが芽生えてきた。

国際サイクリング大会では不満や危険な部分があることも分かるけど、参加される方たちは私たちにとってはお客さんとして大切だよねと言って住民が住民を諭す風景が見られるようになったこと、そういった受け入れる土壌が培われたことや住民の心の変化が起こったことはうれしいことであった。

Q 行政側の苦労話もお聞かせいただきたい。

A 行政側としては、公共交通機関との連携の問題である。

東京、大阪等から来られる方が今治駅まで来た時に、今治駅でレンタサイクルをしてもらおうと公共交通機関の補完になるが、今治駅からサンライズ糸山までのバスが、平日は5便、週末は3便しか運行しておらず、生活路線の小さなバスであるため、公共交通機関の補完を何とかしたいと思っている。

Q 観光振興は受け入れのための基盤整備や地域経済をどのように活性化させていくかが大切であると思うが、日常的な行政、住民、NPO法人との連携はどのようにとられているのか。

A 普段からみんなで会っている。

シクロツーリズムしまなみでいろいろな事業を発案し実施してくれているが、事業化するための事業計画作成の際等に話し合いを行っている。

自転車に関してすべてが繋がる必要があり、今治市では健康面、環境面、観光面等の調整を観光部署でやっていただいている。そもそも自転車に関する事業は、農山漁村地域の活性化のための事業であったため、農政局との繋がりはあるが、農政局にいきなり話を持って行っても聞いてくれないので、観光部署がワンストップになってくれるとありがたい。

愛媛県には自転車新文化推進室があり、ワンストップの部署があるのもやりやすいと感じている。

総括（古川経済企業副委員長）

本日は、皆さまからさまざまな意見を聞かせていただき、世界に誇れるサイクリストの聖地として、県議会としてもさまざまな施策をしっかりサポートしていきたいと思うので、これからもよろしく願いしたい。

経済企業委員会の会議の様子





建設委員会

開催日	平成 29 年 12 月 19 日 (火)
開催場所	上島町弓削地域交流センター
テーマ	上島架橋による新しいまちづくりについて
参加者	<p>地域代表者</p> <p>上島町 岩城区長 新谷 満 同 生名区長 津國 賞 同 下弓削区長 菊本 洋迪 同 上弓削区長 岩瀬 通房 同 佐島区長 川上 正司</p> <p>建設委員会委員 経済企業委員会委員 (オブザーバーとして参加)</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域住民は、架橋後の経済効果や交通効果のほか、上島 4 島が 3 橋でつながることによる地域の一体感の醸成に非常に期待している。課題としては、島同士が橋でつながっても、最終的に今治や本州方面に行くには海上交通に頼らなければならないため、特に車を利用できない高齢者は、架橋後に海上交通がなくなってしまうことを心配している。そのほか少子高齢化に伴う小中学校の再編等といった問題もあるが、これらは町長を中心に、行政と住民との話し合いでひとつずつ解決していく必要があると思う。 ・上島町は小さなまちの寄せ集めであるが、交通は便利でインフラも都市並みに整備されており、自慢の町である。そこに岩城橋がかかり、ゆめしま海道がつながることを、とても楽しみにしている。島を訪れた人達をどのようにもてなすか、道の駅のような建物を作り地元の人で運営することも考えられるが、地域の特産品をどう扱うかといった問題があり、それを解決することで、もう一度来ようという気持ちにさせることができると思う。ただなかなか良い知恵が浮かばないので、岩城橋完成までの 4 年をかけて、先行きを見通していきたい。

- ・生名島と因島を車に乗ってフェリーで行き来する際、乗船時間に合わすには港に駐車場が必要であるが、因島側が既に飽和状態である。今後、岩城橋がかかれば車がさらに増加すると思われるが、良い解決策がないので考えてほしい。また、4島を橋でつなぐだけではなく、やはり本土から人を呼ばないと架橋のメリットがないので、岩城島と生口島の間できるだけ早く橋をかけてほしい。これができると地元の活性化にもつながるので、ぜひとも考えてほしい。
- ・岩城橋完成後は、交通弱者のためのアクセスの確立といった課題が残るのではないか。生名橋が開通して6年経つが、いまだにそうした課題があることも踏まえ、橋の完成前に課題を少しでも減らし、住民が気持ちよく使用できるようなアクセス体制にしたいと考えている。また、広島側の駐車場確保の件は、上島町と尾道市が話し合いをしても、結局は広島側にはメリットがないので、なかなか耳を傾けてくれない。県同士で話し合ってもらう方が、良い方向に進むのではないか。
- ・上島架橋は島民の悲願であり、経済効果においても時間の制約を受けず、地域間のつながりや通勤・通学などの利便性が向上し、行政や観光産業の集約化など、平成16年に合併して上島町が誕生したが、ゆめしま海道が全線開通してこそ、本当の意味での上島町の新たなスタートだと思う。岩城橋の工事関係者の安全と1日も早い完成を願っている。佐島自体は、島おこし協力隊がつくった「しまのひろば」の運営や移住者の受け入れなどで、活気のある地区となっている。

質疑応答

Q 現在の交通体系はどのような状況か。

A 橋でつながる生名・佐島・弓削には、3島での有料バスがあり、町が時刻表や停車場所等の検討を重ねて運行している。生名橋完成後、今治行きの船は赤字対策等で減便したが、交通弱者のアクセスの問題で様々な意見が出て、バスの運行回数を増やした。本来はバスよりも船の方が便利であり、高齢者などでは、船で15分で行けるところをバスで30分かけて行くといった矛盾したア

クセスが続いており、これは課題をひとつずつ話し合っていないと、いくらバスを増便しても解決しない課題である。

また、岩城の場合は、島外へ出る場合に船を利用するのと、島中での無料福祉バスがある。ただし、無料福祉バスは町が運行しているので土日や祝日は休みで、平日に6便程度走っている。

Q バスについて、増便以外に改善を望むことは何か。

A 運転手が不足しているので、確保対策にしっかり取り組んでもらい、充実した体制を作ってもらえたら、バスの運行もスムーズにいくのではないかと。

Q サイクリストの訪問が増えていると聞くと、町外に対するPRはどのような形で実施しているのか。

A 区長が町外でPRすることはなく、行政の方で実施しているのではないかと。

例えばサイクリング大会では、行政が内容を決めて地域に通达し、それに対して住民が沿道での応援やおもてなしに協力しており、これまで住民側から大会を実施してほしいと依頼したことはないが、今後はだんだんとそういう方向に持って行き、住民から盛り上げていかなければいけないと考えている。

Q 因島と今治では、どちらとの交流が多いのか。

A 弓削と生名の場合は、昔、因島にあった造船所に通勤している人がほとんどだった関係で、経済圏的には因島側である。また、岩城の場合は、海上交通を利用して、病院や買い物に今治へ行く人と因島の方へ出て行く人が半々である。

Q 上島町でこれは自慢ということは何か。

A 岩城島には、島の中心の積善山に三千本桜という桜の名所があり、花見の時期にはかなりのお客さんが訪れる。名産としては、昔からある芋菓子と、最近では青いレモンがある。

生名島のスポレク公園にある野球場は、えひめ国体の軟式野球の会場となったが、土が非常に良く、水はけも良くて、大雨とな

った予選会も予定通り試合が消化できた。また、球場から直接海や島の景観が見え、島外から訪れた人が感心していた。

Q 岩城島と生口島に橋をかけ、3橋ではなく4橋にというお話があったが、もう少し詳しく聞かせてほしい。

A しまなみ海道につながれば本土から人が来て、岩城の名産品を買うことで経済効果も上がり、弓削まで足を延ばしてもらえるかもしれない。そうしたことで地域の活性化につなげたい。

結局、上島町が橋でつながっても、最終的に本土には船でないと行けないので、距離的には生名から因島か、行く行くは上島町から本土に向けての橋をできるだけ早くかけてほしい。また、橋をかけても素通りされたら何の値打ちもないので、その辺も考えてほしい。

上島町は、松山から見たら北の外れの離島であるが、上島町から見ると尾道や福山は目と鼻の先であり、交通の便は、今治に渡るより福山に行く方がはるかに便利である。この島は広島に近い地域であり、今治や松山はどうしても遠く感じるが、愛媛県の中に入っているので、愛媛県から見たら離島ということで難しいところがある。そういう希望があるということを中心に留めておいてほしい。

○ 愛媛県議会として、上島架橋で最後に岩城橋をかけた後にどうするかという議論は、弓削大橋を建設している頃から既に出ている。因島側か今治側か、あくまで地元がどう望むかが一番大事なんだという話は出ているので、愛媛県として、決してこのことを考えていないということではない。

また、架橋にはメリットばかりではなく、残念ながらデメリットもある。例えば宇和島の九島大橋では、夜中に不心得者が橋を渡ってきて海に不法投棄するとか、自転車やバイクなどの盗難が増えるといった問題があったが、橋の出入口への防犯カメラの設置や街灯を増やすといった対策のおかげで被害も大幅に減ったので、そうした先進事例も参考にしてはどうか。

○ 4島が橋でつながることを売りにして、しまなみ海道からは少しそれているけれどもこっちへ来なさいというような情報発信を、地元の行政や県とともに、皆さんが一緒になってするべきではないか。松山に住んでいる人には県境の住民の感覚はなかなかわからないので、県境の意見をどんどん発信してもらうことは大事だと思う。

Q 生名橋ができたときの人の流れはどうで、岩城橋ができた後の人の流れはどうなると考えているか。

A 弓削から生名へは、フェリーで因島や尾道、福山に渡る際、車で乗るために利用する人がほとんどであり、逆に生名から弓削には、たくさんではないが買い物に来る人が利用するという状況である。また、用がなくても行ってみようという人もいる。

岩城には造船関連企業があり、弓削や佐島、生名から海上交通で通勤している人が、橋ができれば車通勤も可能となるが、そのときに現在ある海上交通がどうなるか。全くやめてしまうか、一部を残してある時間帯だけ運航するかによって、橋の利用状況も変わってくると思う。

総括

(松尾 建設委員長)

橋のない松山沖の中島の出身者から見るとうらやましい町なので、5年後、10年後に橋をかけて良かったと言えるよう、行政と一緒に、まちづくりに頑張ってもらいたい。

(宇高 建設委員会副委員長)

これまでなかなか上島町まで来ることがなかったので、本日は地元のお話を聞き、また、岩城橋の建設現場を見て、大変参考になった。

これから橋で島がつながることにより皆さんが住みやすくなることにつながる、これ以上のことはないので、岩城橋完成予定の4年後に期待して、これからのかじ取りについて興味深く見せてもらい、また様々な形で力添えができればと考えている。

建設委員会の会議の様子



文教警察委員会

開催日	平成 29 年 12 月 20 日（水）
開催場所	県立長浜高等学校
テーマ	地域との連携による高校の魅力化について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>愛媛県立大洲高等学校 教諭 稲積 俊英 愛媛県立大洲農業高等学校 教諭 穂岡 太郎 大洲エビネ会 会長 西川 和弘 愛媛県立長浜高等学校 教諭 重松 洋 濱屋 代表（西村兵太郎先生・絆の会 会長） 濱田 毅</p> <p>文教警察委員会委員 総務企画国体委員会委員（オブザーバーとして参加）</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大洲高校では、経済調査部の部活動で生徒が考案した大洲コロッケを市内業者の「大洲コロッケプロジェクト委員会」が製造し、生徒が販売している。年間 5、6 回は行事やグルメコンテスト等へ参加し、大洲青少年交流の家や県ブランド戦略課、一般企業から販売に関して声をかけてもらうなど、知名度は上がってきている。生徒は地元のことを多くの方に知ってもらい、地域に貢献している気持ちを持つことができている。生徒数減少による部員の確保や輸送・冷蔵等の関係で遠い地域になかなか販売できないことが課題である。商業科の一部授業で販売活動を行う取り組みもしており、今後も活動を広げたい。 ・大洲農業高校では、農協や市、国土交通省等とも連携した活動をしているが、研究活動が農業教育の主たるところで、活動を通じた研究発表で全国大会へ出場している。卒業後は地元に残って農業、関連産業等に 74%が就職し、まちを支える人材を育てる学校の目標が達成できているのではないかと思う。大洲は国内でも有名なエビネ産地で、大洲エビネ会と連携して研究し、県外視察やエビネの展示なども行っており、高齢化している大

洲エビネ会に卒業後に入会し、技術・知識を若い世代につなげることもできている。最近の研究成果として、薬品を使用した倍数化技術でよい品種を作出し、千葉大学の教授に認めていただいているほか、大洲エビネ会会長の紹介でオランダからの研究者視察を受け入れ、ヨーロッパ、海外にもつながっていくといった成果が上がってきている。

- ・大洲エビネ会では、大洲農業高校のバイオテクノロジーの施設を借りた研究育種を約 20 人が行っているほか、来年 50 回となる大洲えびね展の開催などの連携した活動を行っている。高校に千葉大学の教授を紹介したほか、昨年、今年とオランダの研究者の視察で高校を紹介したところ、高校の取り組みに非常に感心していた。専門書「日本のえびね」で高校との連携を紹介しているが、エビネ関係者からはうらやましがられている。
- ・長浜高校の地域と連携した水族館部の取り組みは視察で説明したので、それ以外の話では、生徒が発見したイソギンチャクにカクレマノミが刺されない理由を応用し、イソギンチャクと同じ刺胞動物のクラゲに刺されないクリームの開発を静岡県の化粧品会社と進めている。将来的に長浜にある化粧品の工場で製造できればと思っている。東京オリンピックでサーフィンが正式種目になり、外国製クリームを使っているサーファーに国内製クリームのニーズがあることから、これをビジネスチャンスととらえて、早ければ来年の夏頃に商品が完成するよう進めている。
- ・長浜高校と地域の連携として3つの取り組みを紹介する。1つ目は「長浜まちなみ水族館」で、長高水族館の開館日に同校を起点に魚屋や料理屋など水槽を持っているところを回るスタンプラリーを行い、長浜に興味を持ってもらう取り組み。2つ目は、長浜商店連盟が長浜高校生に限ってサービスをし、物質的・精神的に応援しようという「長浜たびだち応援プロジェクト」で、坂本竜馬脱藩で宿を提供した富屋金兵衛の夢に燃える青年たちを応援しようという気概を受け継いだもの。毎年応援マップを更新し、店の利用もしてもらおうというものである。3つ目は、肱川あらし予報会の活動の中で地域振興映画を作ってい

る監督と知り合い、市の補助金を利用して11月に映画「赤い橋のある町で」がクランクインしている。肱川あらし、長浜大橋、高校の水族館部の活動を中心とした学園ドラマで、長浜と高校の魅力を発信できればと思っている。

質疑応答

Q 大洲農業高校の卒業生は半数以上が就職だと思うが、大洲高校ではどうか。また、地元の魅力を感じて進学後に戻ってくる割合はどうか。ほかの2校と比べると非常に難しいと思うが、高校3年間で魅力を伝えていただきたい。

A 普通科はほぼ進学。商業科では8割が進学し、就職は10名程度である。そのうち3分の1程度は地元に残るが、女子は銀行への就職が多く、男子は松山市などへ就職している。大卒後に戻る生徒はなかなかいない。

Q エビネの研究等は将来的に職業、今後の糧となるようなものなのか、それとも趣味の域といった内容なのか。歴史や技術を継承しながら、よい産地となるよう期待している。

A 目指すところは産業化で、倍数化の技術、ノウハウはある。構想の段階だが、オランダとつながりができたことから、ヨーロッパへの輸出といった道筋ができればと進めている。

色や形の進歩した品種ができつつあり、家庭の食卓に置けるようなものができれば別の道が開けるのではといった研究もしている。

○ エビネの販路の確立が必要だと思う。技術が確立してきていることを発信し、県の認定を受けるといった働きかけをしていたかどうかのほうがいいのではないかと。

Q 農業高校でJAとの連携といった取り組みをしているところもあるが、地元との交流でどのようなことを行っているのか。

A 大洲でのイベントには積極的に参加し、エビネ以外にも蘭、菊、花の苗なども作っている。

今年の高校の農業祭では、青年農業者協議会の「おおずプレミアムマルシェ」に参加を呼びかけ、働く大人の姿を生徒に見てもらい取り組みを新たに行い、生徒に好評であった。

Q 三島高校書道部の映画化で他地域から入学するといった例もある。長浜での映画は地域おこしの意図もあると思うが、大洲以外から入学者が来ることも期待しての取り組みか。高校のことを思って活動してくれる人がいるのは高校としても力強いと思う。水族館部の視察で説明してくれた生徒から海洋学部のある大学への進学を希望しているといった話を聞いたが、目的を持ち輝いていると感じた。そのような部分が伝われば、入学者ももっと来るではないかと思う。

A 最初は地域の発信に重きを置いていたが、東京から転校して水族館部に入る女子生徒を主人公とした内容で、全国へも発信したいが、中学生に見てもらいたい。長浜の雰囲気を知ってもらい、高校に来てもらいたいという切実な願いがある。寄宿舎や寮といった受け入れ体制の問題があるが、一緒に盛り上がることでよい結果が出ることを期待している。

長高水族館立ち上げ時に先生たちとつながりができ、思いがいろんな人につながって少しずつこのような形ができたのではないかと思う。

○ 長高水族館のカクレクマノミは、多く生まれると無料でお分けしていると視察で聞いたが、一方で農業高校ではきっちりお金にしようとしている。制約もあると思うが、メイド・イン・長高の魚を市販できれば学校を知ってもらうことにつながると思うので、そういった努力もしていただきたい。

総括（梶谷文教警察委員長）

参加者に熱く語っていただき、この地域は盤石だ、熱さがあると確信した。どうか各学校において、これからも子供のよい教育のためにお骨折りをいただきたい。

文教警察委員会の会議の様子

